

〔紹介〕

庄司達也・山岸郁子・小野美典・安達原達晴著 『日本語表現法』

林 伸 一

当学会の会員である小野美典氏らの手による『日本語表現法』が翰林書房から、このほど出版された。「21世紀を生きる社会人のたしなみ」という副題が示すとおり、新情報が多く盛り込まれたテキストである。

第1章は「まずは書いてみよう」と題して書くために知っておきたい基礎知識が示されている。いきなり原稿用紙を使って横書きや縦書きにする課題が提示されている。原稿用紙の使い方がわからない大学生がいるが、同書には付録として原稿用紙が付いている。「繰り返し記号」についてのコラムもついており、「人々」の「々」などは、記号であって「字」とは呼べないとの解説があり、「同の字点」という名称など教員の側も知っておきたい知識である。

第2章では「悪文とは？」と題して、文を書くときの留意点が示されている。不適切な文を適切に書き換える課題が出されている。最近のテレビのクイズ番組では、日本語の間違い探しが出題されているが、そのようにして日本語の授業でも活用できる。

第3章では、「さあ文章を書いてみよう」ということでわかりやすい「起・承・転・結」などの文章構成法が解説されている。さらに、初めに結論を示し、そのあと本論を展開する「頭括型」やその逆の「尾括型」のパターンなども示されている。

最近、「いただく」と「くださる」など敬語の使い方の問題が話題になることが多いが、コラムで文化庁の見解が解説されている。

第6章では、「敬語を適切に使おう」と敬語の基礎知識が課題とともに示されている。大学生の敬語苦手意識やいわゆるアルバイト先でのマニュアル敬語などが卒業論文のテーマになっている中で、敬語の5分類などが資料として示されており、敬語の使い方の交通整理に役立つと思われる。

第4章では、「ルールを守って引用しよう」と引用上の留意点をテーマにしている。大学の授業で、繰り返し引用の重要性や引用の不備を説いてもなかなか徹底しないのが実情である。引用文や論文のタイトルは「」で、書名は『』という分け方や引用文中の「」は『』に代えるという一般的なルールが高校の教員や新書本の編集者にも意識されていないなど問題があり、大学生だけではなく文書作成に関わる社会人にも読んでもらいたい書である。

従来の『国語表現法』といった教科書と異なる点は、「プレゼンテーションをより効果的に」（第5章）「効果的な電子メールとは？」（第8章）などといった現代的な課題がテーマ化されている点である。さらに第9章では、「効果的な文書作成」としてエントリーシートを書く課題が出されている。大学の授業でも使わせてもらったが、まさに就職活動中の学生はもちろんのこと、そのほかの学生にも自己分析に役立つと好評であった。

第7章では「手紙を書こう」という課題で、手紙の様式・内容と出し方などが示されている。第10章では「冠婚葬祭・贈答のしきたり」というテーマで祝儀袋や不祝儀袋の書き方や使い方が提示されている。最近、日本人であるのに日本のしきたりがわからなくなっているということが問題視されており、付録に祝儀袋などに書き込む練習ページがあるのが注目される。礼儀作法に不安を持つ日本人だけでなく、日本事情を学ぶ外国人留学生にも大いに役立つ教材である。

練習問題には解答例も示されており、自学自習用としても活用できるであろう。